

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究
実施方法等

【類型Ⅲ】

1. 実践校について

①実践校名	(こくりつだいがくほうじんとうきょうがくげいだいがくふぞく こうとうがっこう) 国立大学法人東京学芸大学附属高等学校		
	学科名	児童・生徒数	学級数
	普通科	986 名	24 学級

②実践校名	(こくりつだいがくほうじんとうきょうがくげいだいがくふぞく たけはやちゅうがっこう) 国立大学法人東京学芸大学附属竹早中学校		
	学科名	児童・生徒数	学級数
	—	426 名	12 学級

③実践校名	(こくりつだいがくほうじんとうきょうがくげいだいがくふぞく たけはやしょうがっこう) 国立大学法人東京学芸大学附属竹早小学校		
	学科名	児童・生徒数	学級数
	—	405 名	12 学級

2. 実践研究の対象

- ①第2学年1学級39名
- ②第3学年1学級36名
- ③第6学年1学級35名、第5学年2学級64名

3. 実践研究の実施経過

- ・2022年4月1日 プロジェクトのプレミーティング

- ・2022年5月25日 附属研究会竹早地区社会科部会ミーティング
- ・2022年6月16日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年6月20日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年7月8日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年7月11日 香川大学附属校による竹早地区視察対応
- ・2022年8月1日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年8月9日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年8月17日 文部科学省ヒアリング
- ・2022年8月24日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年9月7日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年9月15日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年9月21日 附属研究会竹早地区社会科部会ミーティング
- ・2022年9月22日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年9月27日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年9月28日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年10月3日 ゲストティーチャー（岡部氏）との事前打ち合わせ
- ・2022年10月6日 ゲストティーチャー（武者氏）との事前打ち合わせ
プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年10月7日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年10月13日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年10月20日 授業実践（附属竹早小）
- ・2022年10月24日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年10月27日 授業実践（附属竹早中）
- ・2022年11月8日 ゲストティーチャー（新堀氏）との事前打ち合わせ
- ・2022年11月9日 授業実践（附属高等学校）と研究協議
- ・2022年11月25日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年12月6日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年12月9日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年12月13日 授業実践（附属竹早小）
- ・2022年12月14日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年12月15日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年12月16日 授業実践（附属竹早小）
- ・2022年12月22日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2022年12月26日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年1月6日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年1月13日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年1月19日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年1月20日 事業成果発表会
- ・2023年2月6日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年2月8日 プロジェクト打ち合わせ

- ・2023年2月17日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年2月27日 鳴門渦潮高校と鳴門教育大学による附属高等学校視察対応
- ・2023年3月2日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年3月6日 プロジェクトのWEB ページ公開
(<https://www2.u-gakugei.ac.jp/~2030pj/educationproject/>)
- ・2023年3月20日 プロジェクト打ち合わせ
- ・2023年3月29日 プロジェクト打ち合わせ

4. 実践研究の実施体制

事業実施責任者 東京学芸大学 准教授 荻上健太郎

- ・大学
東京学芸大学 教授 西村圭一
東京学芸大学 教授 松尾直博
東京学芸大学 専任講師 長谷川友香
東京学芸大学 理事 松田恵示
東京学芸大学 専門研究員 長澤京子（連携コーディネート担当（※））
※本事業における学内外の関係者との連携推進を主に担当

・実践校(附属)

東京学芸大学附属高等学校	校長 大野弘 教諭(公民科) 長谷川智大 教諭(数学科) 佐藤亮太 教諭(保健体育科) 松川 想
東京学芸大学附属竹早中学校	校長 藤本光一郎 教諭(社会科) 上園悦史 教諭(数学科) 小岩 大 教諭(保健体育科) 斎藤貴博
東京学芸大学附属竹早小学校	校長 鎌田正裕 主幹教諭 山田剛史 教諭 上野敬弘 教諭 早川光洋 教諭 恒川徹 教諭 平山秀人

(協力者)

- ・KSTN(きょうそう・さんかく・たんきゅうネット/OECD 日本共同研究)
学習院大学 教授 秋田喜代美
福井大学 教授 木村優
東京大学 教授 小玉重夫

広島市立大学 学生 竹内陽渚
早稲田大学 学生 南朴木里咲
福島大学 学生 本田美久
東京大学 学生 緩詰千馬
角川ドワンゴ学園 N 中等部 七島海希
新潟大学附属新潟中学校 他田さくら
福井大学 小島萌々花
熊本市立必由館高等学校 石川明嘩
東京大学教育学部附属中等教育学校 提橋みどり

- ・ゲストティーチャー
東京海上ビジネスサポート 新堀隼
特定非営利活動法人境を越えて 理事長 岡部宏生
サウンドスケープデザイナー 武者圭

5. 教育委員会等として取り組んだ内容

本事業の実践的研究の場となる附属校では、「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」という共同研究を本学と共に行っており、企業（約 40 社）、岡山県津山市、岩手県山田町等の教育委員会とも連携し取組を進めている。本年度の事業においても、これらの教育委員会との間での情報交換等を行った。また、本学が事務局をつとめる OECD 日本共同研究プロジェクトのきょうそうさんかくたんけんネット (KSTN) との協働研究として、KSTN の運営委員会のメンバーや KSTN に参加している福島、東京、新潟、福井、熊本等の地域の教育エコシステム（教育委員会を含む）と附属竹早小中、並びに附属高校が連携し、モデルの地域展開、公立校での展開可能性について意見交換等を実施した。附属竹早小における授業実践に際しては、所在する東京都文京区の選挙管理委員会との連携により、投票用紙や点字打刻機の貸与に協力いただいた。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

【類型Ⅲ】

実践校名：国立大学法人東京学芸大学附属高等学校

実践校名：国立大学法人東京学芸大学附属竹早中学校

実践校名：国立大学法人東京学芸大学附属竹早小学校

研究主題

「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発

主題設定の理由

主権者教育推進会議は「今後の主権者教育の推進に向けて（最終報告）」（令和3年3月31日）をまとめ、主権者教育の入口は「幼少期から社会の動きに関心を持つことにある」と指摘している。また、各学校段階からの取り組みの他に家庭や地域での充実策も盛り込んだことから、政治的な関心を学校だけではなく、家庭、地域との連携を模索することでさらに政治への関心を高めていくことが求められていると言えよう。その点において学校の授業もまた、社会に拓かれたものとして構想されることが求められているとともに、これまで実社会との接点を躊躇、遠慮、忌避してきた学校現場の教師の授業構想にも新たな課題が求められてくるといえる。こうした社会との接点を模索することはいわゆるカリキュラム・マネジメントの観点からも積極的に取り組むことが望ましいとされており、本研究においても外部講師や学校外の諸団体との交流・連携を模索しながら授業を構想することを主眼としている。

そこで本プログラムにおいては、子ども達に考える時間や体験する時間を十分に確保し、それら諸課題を解決するために考えることに没頭することが、子ども達を地域や社会の課題を主体的に考えることができる主権者として育成することに資すると考えている。また、子どもたちが直面する課題等に向き合う時間を十分に確保した『「余白のあるカリキュラム」＝「遊び」のもつ価値付けを重視する授業デザイン』を実行するために、社会科・公民科を中心に主権者教育を構想しながら「遊び」を重視した主権者教育の在り方を提言するものである。

このような「遊び」の持つ諸特徴は、国や社会の問題に対して、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者としての資質・能力を育む主権者教育とも関連性が高く、本学習プログラムは、授業構想の中に児童・生徒が自由闊達に自分自身の疑問や問題意識を表現する場を設けることで、互いに意見を交換し、自身の考えや他者の価値観を受け入れながら思考を深めていくことを重視している。さらに実社会との接点として障がいのある当事者の方から話を直接聞くことでさらなる問題意識が惹起され、よりよい社会を形成していくための視点や方策をつかむきっかけになるなど、他地域においても参考となることを期待するものである。

概要

①「遊び」の持つ自発性、主体性、他者性、協働性といった特性や、発達段階に応じた実社会との接点の様々な可能性に着目して、小中高の連携を図りつつ教科等横断的、社会参画的なカリキュラム・マネジメントを試みる。

②社会科・公民科を中心に、自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力など、主権者としての資質・能力を育む学習プログラムを開発する。

学習プログラムの主な内容

- ① チームスポーツを通して公平・公正なルールのあり方について協働する【保健体育科（中）・8時間】

サッカーという遊びを構成するルール（仕組み）を軸に、自らがその空間を生み出す主体となって、より面白い遊びをつくりあげるために、自分たちのグループで起きていた事象を振り返り、感想の共有、意見交換、評価をしながら改善に向けてアクションを起こす。

- ② 身近な事象や関心事を糸口の実社会の課題と結びつけ、多角的・多面的に考察する【算数（小）・1時間】

合計特殊出生率の読み取りから、少子化をどう思うかについて意見交換をする場面を設定し、出生率1.3の値が小数値であることから10人を単位に日本の少子化の現状と課題について話し合いながら理解を深めさせる。

- ③ 当事者との対話や、専門家へのインタビュー、アンケート調査などの諸資料などから、探究的な学びを深める【社会科（小・4時間、中・5時間）・公民科（高・1時間）】

（小）誰もが安心して暮らせる共生社会の実現に向けて自分や社会が取り組むべき課題を話し合う。

（中）日本の障がい者支援アンケートをふまえ、現在の選挙の課題を直接聞き、公平・公正の視点からの話し合いを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つけたりしながら、多様性を認め合う社会を目指して自らの生き方・あり方を問い直す。

（高）インクルーシブな選挙制度の実現のために主権者として、諸制度を適切に理解するとともに制度の影にある諸課題を浮き彫りにし、解決策を議論する。

学習プログラムの成果の概要

- 合計特殊出生率の読み取りから、我が国が抱える少子化の問題について意見を交換し、よりよい社会のあり方について考えを深めることができた。
- 未経験者を包摂するルールづくりを通して全員が楽しめるサッカーを作り出しことで、主体的なかかわりを促し、サッカーの面白さの実感につながるとともに、協働して「遊び」から学習が発展して主権者教育実現を示した子どもの姿と考えられる。
- ゲストティーチャーとの交流（障がい者との直接対話、継続的なやり取り）を通して、社会を構成する様々な人の視点から考えることの大切さを学び、そのような意識をもつことが多様性を認め合う社会の基礎となるという気付きにつながった。

- 障がいのある方と実際に議論し、提案内容の評価や精査を行うことで、相手を意識して自分の意見を伝える力及び相手の意見を受け取る力の伸長が図られるとともに、考察を深めることができた。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（詳細）

【類型Ⅲ】

実践校名：東京学芸大学附属高等学校学校(公民科(現代社会))

学習活動① 課題解決型討論

○ 実践目的

本学附属学校三校共通で、障害者と共に生きる社会を実現するために、彼らが抱える問題を知り、理解し、考え、提案する。その最終段階としての高等学校における実践である。特に強く意識したことが、主権者として社会に参画する中で、自ら見出した社会課題に対してどのような立場から解決策を提案していくかということである。

以上の意識を伸長することを目的とした実践について報告する。

○ 実践計画

(1) 対象とした授業・生徒

現代社会 第2学年1クラス (39名)

(2) 単元計画

時	授業目標	学習内容
事前	選挙制度の確認及び、自分の中にある「障害者」像の言語化。	アンケートを実施し、自らの認識の中にある障害者と社会の関わりを具体化する。
	インクルーシブな選挙制度の実現のために	発達障害当事者の方を招いてワールドカフェで議論する。
事後	「障害者」という概念の再考と学びの振り返り。	生徒から集めたアンケートをもとに、学びを振り返るとともに今後の必要な学びの調整を図る。

○ 実践の詳細

小中高の三校それぞれに異なった障害のあるゲストティーチャーが割り振られ、本校においては発達障害の方を迎えることが決まった時点で実践の核となる手法を決めた。本実践での議論に使用したのが「ワールドカフェ」と呼ばれるディスカッションの形態である。ワールドカフェの手順そのものについてはここでは詳細は省くが、本来ワールドカフェは課題に対して解決策を模索するための手法ではなく、参加した全員の意見や知見を集めることで新たな気づきを得ることに長けた手法である。本実践で重視したことの一つに、発達障害当事者であるゲストティーチャーと対話することによって得られる知識や、関わりの薄さから生じていた思い込みや先入観を打破することがある。だからこそゲストティーチャー

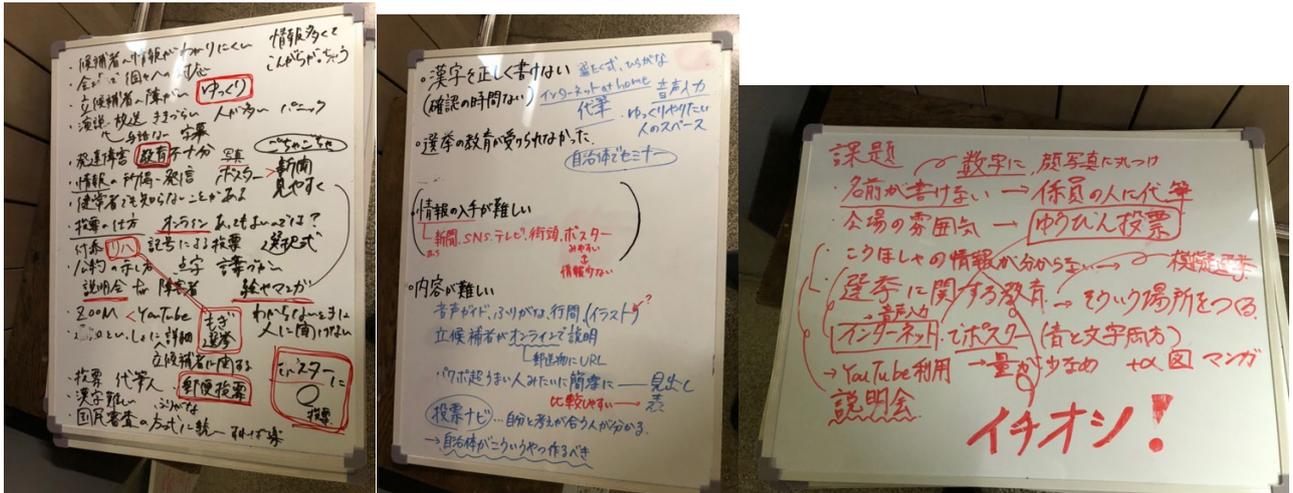


にはグループの一つに入ってもらったわけだが、それでもなお40人近い生徒全員と直接対話することは難しい。しかしワールドカフェによって間接的ではあるがゲストティーチャーとの対話が実現する。



ワールドカフェを行う前に三校社会科公民科共通の事前アンケートを実施し、同様に事後アンケートで意識の変化を確認した。

ワールドカフェにおいて各グループがまとめたホワイトボードの一部を以下に提示する。



成果

事前アンケートの「障がいのある人に関する、国や地方公共団体の施策のなかで、あなたがもっと力をいれる必要があると思うものを教えてください。」という項目における回答を一部抽出する。

- ・点字ブロック
 - ・道路などの交通整備、インフラ整備
 - ・盲導犬や介助犬のために水飲み場とかをもっと設置するべきだと思う。駅の改札が階段を登らないといけなくて、エレベーターとかが設置できないのであれば半分はスロープにしたほうがいいと思う。
 - ・一般の人に障がい者への接し方のレクチャー。「助けたい」という思いがあっても何をすれば良いかわからないなどの理由で助けることを遠慮している人が少なからずいると思うから。
 - ・バリアフリー
 - ・音の出る信号機をもっと増やす。最近旧型のごっつい信号機から液晶テレビみたいな信号機に変えられる工事は多くあるが、そんなのよりまず音の出る信号機に切り替えることの方が優先されるべき。
- 公共交通機関（主に電車）で車椅子や白杖を持った人が利用しやすいような、混雑緩和、駅とホームの隙間を極力無くすなど。

これらの回答からは障害＝身体障害という認識が見えてくる。もちろん中には精神障害や発達障害について言及した回答もあったが全体から見ると少ない。主権者としてますます社会とのつながりを深めていく高校生にとって、認識によって自分の世界を広げていくことがいかに重要なかが改めて分かる。認識していないものは自分の世界の中に存在しないものなのだから。

事後アンケートから一部抜粋する。

- ・障がい者にとって選挙というのは困難なことであり、それは投票するのが難しいというよりは情報を得るのが難しいという側面が大きいということ。
- ・障害を持っている方と聞くと、身体に障害のある方(手や足が不自由など)のイメージが勝手にあったけれど、ゲストティーチャーのお話を聞いて、身体だけではなく知的または精神的な障害を持っている方も多くいらっしゃるということを忘れてはいけないなど感じた。みんなが暮らしやすい社会を考えていく中で、身体障害を持っている方も知的障害を持っている方も同じ障がい者として扱ってしまっているが、障がいの重さは人それぞれであるため、個人個人に合った政策を考えていかなければいけないと改めて実感した。一人一人が満足いくような社会を実現するというのはとても難しいことかもしれないが、実現を目指し自分にできることはないか日々考えながら暮らしていきたい。
- ・どうしても障がい者と考えたと、目に見えてわかる身体障がい者のことを連想してしまうが、知的障がい者の人にも優しい投票制度を作るべきだと感じた。投票制度に限らず、現代社会における裁判制度や国会などの制度をしっかりと見直す必要があるように感じた。
- ・障がいと一口に言ってもいろいろな種類があり、その種類によって日常生活の中で不便なことは違うだろうから、それを考えることが大切だと思った。

本実践では、確かに題材は障害者と選挙であるが高等学校における実践の目標としては、主権者として社会に関わり、様々な立場から社会の問題点の解決策を実現可能な制度に落とし込んで社会に提案していく力を伸長することにある。そのために社会には本当に多様な人達がいて、独りよがりな思い込みでは本当の意味での解決すべき課題が見えないということに気がついた生徒が多くいたことが本実践の成果であった。

課題

本実践を新課程の公共で継続的に実施していくことを想定した場合、内容Aの「公共の扉」で扱うか、内容Bにおいて学習指導要領に示されている13の主題のうち「政治参加と公正な世論の形成、地方自治」で扱うことか、もしくは内容Cで探究課題に落とし込んで単元化することなどが想定される。いずれにせよ持続可能な実践を構想するにあたり、授業開設学年の全クラスにゲストティーチャーを招いて共に議論をするという形式は常に行うには相応の困難さがあり、今回の実践を直接的にすべての高等学校へ展開させることは不可能である。今後に向けて整理すべきポイントは2つ。1つ目が始まったばかりの新科目である公共で具体的にどの内容で扱うことがもっとも効果が高いかの検証を進めること。もう一つのポイントは社会的困難を抱えた当事者と直接対話を経なくとも同じくらいの効果が期待できるような、かつ、全国の高等学校で活用しやすいような教材開発をすすめること。すすめるべきことは多い。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（詳細）

【類型Ⅲ】

実践校名：東京学芸大学附属竹早中学校（社会科）

学習活動①ゲストティーチャーからの基調講演を聴く

- ゲストティーチャーの自己紹介とプロフィール、ALS（筋萎縮性側索硬化症）についてスライドで説明する。
 - 障がいのある人たちにとっての選挙の壁について、ご自身がどのように選挙で投票をするのか、経験をお話いただく。
- 呼吸器をしているため、意思の確認をするためにも介助者の支援を必要としている点や、郵便投票の制度についてもふれ、ALS 患者たちが国を相手取って裁判を起こして勝ち取った制度であることを理解させる。



学習活動②「選挙の壁をつくっているのはだれか。なぜ壁があるのか。」について考える

- ゲストティーチャー自身の経験から感じる「壁」と突破法についてご自身の経験からお話をさせていただく。
- 車椅子を利用している例を出して、「個人モデル」（障がいは車椅子の人にある）から「社会モデル」（障がいは車椅子を利用できない環境にある）へと思考を転換していくことの重要性を理解させる。
- 環境がととのっていないことで社会に参加できない状態を「障がい」として捉える視点を共有する。

学習活動③「自分が障がい者だったら選挙に行くか」グループ討論して考えを深める。

- 1) あなたが障がい者だとしたら、投票に行くかどうか？ その理由も。
 - 2) 障がいのある、ないに関わらず、多様な人々の立場から考えるには、何が必要だろうか？
- 投票所に行けるかどうかではなくて、国民として主権があるかどうかが大変なことであるというゲストティーチャーからの指摘を受けて、グループで話合いの場を設定する。



成果

（生徒の変容等）

- 生徒の感想から、「もし私が ALS になったら、思うように伝わらないもどかしさから話すことを諦めてしまうのではないかともしました。」「障がい者支援の発展途上である日本において新しい課題を気付かされた」というように、これまでになかった問題意識を触発されて、世の中への見方・考え方がかわっていった生徒も多

くいた。

- 「僕は授業内で幼少期から身近に感じ、教育としても副読本の導入など力を入れて、障がい者がいるという事実が日常に感じられる世の中が訪れればいいなと思った。」
「個人がすべて負担を負うのではなく、世間一般的に自分たちを変えていく、という思考になればよいと思う。」というように、個人モデルから社会モデルへの思考の展開をきっかけに、広く社会への問題関心が深められている姿も見ることができた。
- 主権者としての投票を価値あるものとして平等に行使しうる権利が妨げられていることへの不思議さ、疑問、批判的な思考が生徒たちの中に芽生えてきた。

(取組の工夫)

- 障がいをもつ人たちから見た社会の様々な課題を見出し、特に選挙に焦点をあてて、その課題の改善に向けての方策についてグループで話し合ったり、討論したりする。
- グループでの話し合いの内容を全体で共有・概観することにより、自分とは異なる意見や価値観をもつ人の存在を知り、さらに与えられた問題に対して、それではどうあることが良いことなのか、という人としてのあるべき姿が探究されるように工夫をする。
- 多様性を認め合う社会を目指して、どのような課題があるのか見つけ出し、その解決に向けて取り組む人々の姿を学ぶことを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つけたりしながら、よりよい社会の実現にむけて自らの生き方・あり方を問い直すきっかけとする。

(他地域でも参考となると考えられる点)

- 選挙についての関心を高めるために模擬投票を実践することはあるが、今回のように選挙権を公平に行使することの難しい立場の視点から改めて公正な選挙、平等な社会、よりよい選挙制度のあり方を問うという視点は、主権者である国民として責任を自覚させるよい機会となった。
- 事前の学習として有権者としての意識を持たせるとともに、現時点では選挙権を持ちえていない時期であっても、なんらかの政治的課題や政策への関心をもち、社会のあり方を批判的に考察するきっかけをもつことは、選挙の仕組みを理解するだけでなく、選挙への関心を高め、主権者としてその意義や課題を自ら考えていく力となっていくものであり、他地域でも参考となるものである。

課題

- 障がいのある方々が社会への参加をしていくためにどのような壁があるのか、また、少数者の意見だからこそ、選挙という平等な価値をもった行動を保障してくことは、民主的な社会の形成になによりも大切なことであり、多様性を認め合う社会の基礎となっていくことが生徒たちにしっかりと意識づけられた。
- ゲストティーチャーとして来校していただいた方との交流を通してさらに障がいへの理解、社会への関心、政治課題への関心を持って行けるような実践を構想することが今後の課題である。

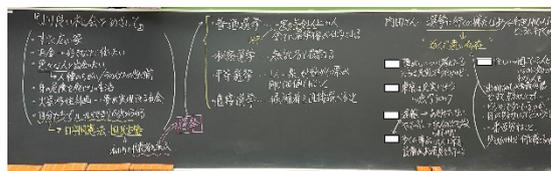
実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（詳細）

【類型Ⅲ】

実践校名：東京学芸大学附属竹早小学校（社会科）

学習活動① ゲストティーチャーに尋ねたいことを考え、質問をまとめる。

- NHK「みんなの選挙」HPに掲載されている「視覚障害がある方の投票について解説」を視聴し、選挙と障害のある人々の関係について関心を寄せる。
- 視覚障害のある人々の生活の様子や選挙に対する考え方について尋ねるために、自分たちが知りたいことをもとに質問事項を考える。
- 考えた質問事項を内容毎に分類（1. 視覚障害に関すること、2. 障害を抱えての選挙に関すること）し、ゲストティーチャーにメールにて投げかける準備を行う。
- 小中で質問事項を共通化した「共生社会に関するアンケート」についてタブレットを使用して行う。このアンケートは、本単元の終わりにもう一度行うことで、共生社会について視覚障害の方との交流を通して考えることができたかを検証するために行う。



学習活動② ゲストティーチャーの方から話を聞いて、より良い社会について考える。

- 「みんなの選挙」をもう一度視聴し、事前に考えた質問事項をゲストティーチャーへ投げかける。
- 点字器を使ってゲストティーチャーが模擬投票を行う様子やICTを活用して他者とコミュニケーションをする姿、質問事項に対する回答をもとに、視覚障害に対する自分の考えを振り返り、見直す。
- より良い社会について「共生社会」という言葉をキーワードに自分の考えをノートに書く。児童の記述には、「誰もが同じように暮らすための援助や介助等の支援」「点字器が錆び付いていないような整備の必要性」「障害のある人に対しての勝手なイメージを作らず、広げない努力」などが書かれていた。



学習活動③ 自分たちの考えをまとめ、ゲストティーチャーに投げかける。

- 前時にノートへ記載した内容をもとに、4～5名程度のグループになって「共生社会」に向けて自分たちができることを話し合い、まとめた。児童は、「障害のある人たちを一人の人として接すること」「健常者との差を埋める努力を私たちがすること」「障害に対する常識を変える」「手話などを習得して、自分たちも障害のある人々に寄り添えるようにチャレンジする」などが考えとして出され、これらをゲストティーチャーに送付した。
- ゲストティーチャーからは、「一人一人が違って同じ人間はいないこと」「同じことをしても、ありがたいと思う人もいれば、そうと捉えない人もいること」「『平

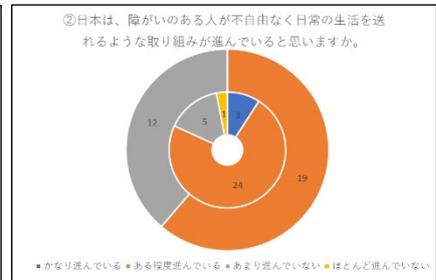
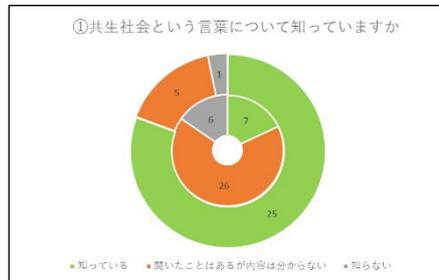


等、公正と公平、過程』が大切になること」が回答として寄せられた。この回答をもとに、改めて「共生社会」に対する自分の考えについてノートに書き、「共生社会に対するアンケート」を行って本活動を終了した。

成 果

(児童生徒の変容等)

- 本活動では、事前 (N=33, 2名欠席、円グラフ内径) と事後 (N=31, 4名欠席、円グラフ外径) に「共生社会」に関するアンケートを実施した。



アンケートを実施してアンケートに関する回答にも変化が伺えた。

- ①については、事後に「知っている」以外に答えた児童6名に対して対面にてその理由を尋ねたところ、「共生社会に対してまだ十分に理解できていないと思うから」というものであり、更に考えなければならないと児童が考えている様子が伺えた。
- ②については、「ある程度進んでいる」と答えた児童をランダムに3名抽出して尋ねたところ、道路など社会インフラとしてまだ未整備の部分があるからなどの理由で答えたことが分かった。
- 「あまり進んでいない」を答えた児童についてもランダムに3名抽出して尋ねたところ、「障害のある人々が不自由なく暮らせる程度まで整備や人の考えが改善されていない」と考えたからということが分かった。このことから、本活動をきっかけに共生社会や障害のある人たちへの関心が高まり、内在する課題に対して考えていこうとする児童が出てきていることが伺えた。

(取組の工夫)

- アンケート結果の傾向を大まかに掴むことで、児童の障害に対する理解や捉えについて共有できるようにした。また、児童の視覚障害に対する理解が限定的であるので、ゲストティーチャーから児童の障害に対する疑問を答えていただく機会を設けた。
- 自分達の考えたことをゲストティーチャーへ投げ返すことで、自分たちの考えが実際と乖離していないかを確認することで、実社会とのつながりを意識できるようにした。

(他地域でも参考となると考えられる点)

- ゲストティーチャーとの関わりを継続的に行うことで、自分たちの考えたことを投げ返したり、回答をもらったりすることだけでなく、自然な交流やゲストティーチャーを通して実社会とのつながりを意識できるようにした単元設定は他地域でも参考になるものとする。

課 題

- 視覚障害だけでなく、それ以外の障害等についても考える機会をつくり単元内に入れることが必要なのではないか。
- 障害に視点が向いているので、このことを選挙に結びつけるよりも政策に結びつけて考えていくことが授業改善につながるのではないか。

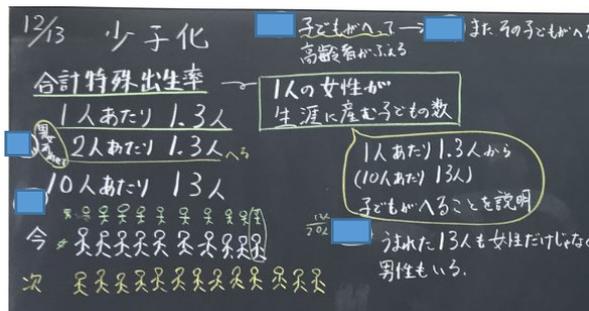
実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（詳細）

【類型Ⅲ】

実践校名：東京学芸大学附属竹早小学校（算数科）

学習活動① 少子化について知り、合計特殊出生率「1.3」の意味について基準を理解することで理解する

- 少子化といわれていることは、子どもが減って人口が減ることであることを知る。
- 合計特殊出生率が 1.3 というのは、女性 1 人あたり 1.3 人の子どもを出産していることを知る。
- 1 人あたり子どもを 1.3 人出産していることから人口が増えていると読み取り、少子化としてはおかしいと捉えたり、実は今は人口が増えていると捉えたりする。
- 女性 1 人あたり 1.3 人ということは、男性の存在を考慮に入れて大人 2 人あたり 1.3 人と捉えると人口減が説明できることを発表したり聞いたりする。
- 一人の女性が生涯に 1.3 人を出産することから、人口が減るという説明をノートにまとめる。

出生率減の
関連記事を掲載
(画像省略)

学習活動② 少子化であることをよいと思うか、よくないと思うかを話し合う

- 働く人（労働力）が少なくなる面について意見を交わす。
- 高齢者の割合が増えて、税金の負担が重くなっていくことについて意見を交わす。
- 人口が増えると住む場所が足りなくなり自然環境に悪い影響を生む可能性に目を向ける。
- 人口が増えると食糧不足なる可能性に目を向ける。
- 家庭で子どもの人数が少ないとよい教育を受けさせられることについて意見を交わす。

成 果

(児童の変容等)

本学習活動は出生率の意味を、基準を明確にして正確に読み取ることと、小学校 5 年生なりに、社会問題としての少子化について関心をもったり、投票権を有する成人になっていく自覚をもったりすることをねらいに行った。

学習活動終末に記述した児童の学習感想において、少子化についての印象や意見を書いた児童は29名中22名であった。

- ・少子化はわるいことばかりだと思っていたけどいいところもあることを知った。でも子供が少なすぎると働けなくなる（働き手が足りなくなる）ので少子化はわるいと思う。
- ・ぼくは何事にも多すぎず少なすぎずちょうど真ん中がいいと思いました。なので1人あたり2人の出生率がいいと思いました。
- ・私は（少子化は）よくないと思います。なぜなら、もし子どもが高齢者になって、その時の子どもが少なくなり、結果的に人口がへってしまうからです。
- ・人口がふえたらけっこう大変だけど、だからってへりすぎるのもよくないと思った。だって、この調子でいくと、どんどん日本から人が消えて、日本のめつぼうが近くなってしまうから。

また、投票行動や政策についての関心を書いた児童は29名中6名であった。

- ・ぼくはたぶん選挙に行くと思うので、もし少子化について言っていたら（少子化対策に取り組む候補者がいたら）投票します。
- ・その人が少子化のことを言っていたとしても、たった1人で変えることは不可能なため、ほかの人をえらぶ。1人あたり1.3人はけっこう少ない。

出生率の読み取りについて書いた児童は29名中10名であった。

- ・少子化なのに1人あたり1.3人生まれるなんて全然減ってないじゃん、と思ったけれど、2人あたり1.3人に減るのはけっこう大変なことだと思う。竹早小だったら次世代は260くらいに、さらに次は169人になるから。
- ・1人あたり1.3人だとふえているように感じるけれど、実は減っている、というのは考え方をかえないと知れないから、いろいろな視点から見て、その見方が正しいか考えるのが大切だと思う。

(取組の工夫)

○小学校第5学年の算数科では異種の2つの量の割合と同種の2つ量の割合を扱う。本学習活動で扱った合計特殊出生率は、女性1人当たりが出産する男性と女性の人数であるので、異種の2つの量の割合とも捉えられるが、人数に対する人数であるから同種の2つの量の割合とも捉えられる。本学習活動は、第5学年の異種の2つの量の割合の学習後、同種の2つの量の割合の学習の前に実践した。基準量が女性の人数で比較量が男性と女性を合わせた出生児の数であることから、基準量に目を向ける学習が行えるようにした。

○基準量に目を向けて合計特殊出生率の数値の意味を自覚的に読み取ることで、数値から見える少子化の現状により興味をもちやすくした。

(他地域でも参考となると考えられる点)

○本学習活動は我が国が抱える少子化を話題にしているため、地域を選ばない。算数科のカリキュラムの余白に設定することが考えられる。

課題

○本学習活動では合計特殊出生率の読み取りから、少子化をどう思うかについて意見交換をする展開をとった。多面的な見方が出された一方で、どのように解決していくかについては話題にしなかった。どのように社会をつくるかに児童の意識を向けるために、どのような政策がよいかなどを話題にすることも考えられる。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（詳細）

【類型Ⅲ】

実践校名：国立大学法人東京学芸大学附属竹早中学校（保健体育科）

学習活動 サッカー

○ 実践目的

サッカーを遊びと捉え、そのルールを主体的に考え、より楽しい、面白い遊びの空間を協働的につくる活動を通して、問題を見出したり、他者と協働したりする力、及び問題を解決する主体として関わる態度を育む。

○ 実践計画

(1) 対象 第3学年男子 4学級（各学級 18名）

(2) 単元計画（全8時間）

時	授業目標	学習内容
事前	自分や他者がサッカーをどう捉えているのか可視化する。	アンケートを実施し、サッカーに対する自分と他者の捉えを見つめる。
1	サッカーの特性を理解できるようになる。	ドリブル・パスゲームを行い、競い合っていることは何かを3つの局面（運ぶ、かわす、入れる）から整理する。
2	サッカーのゲーム性、ルールの必要性に気づくことができる。	ボール集めゲームを行い、ボールを運び、相手をかかわし、目的の場所までボールを入れられるかの攻防の面白さを味わう。
3	サッカーを面白くするために、必要な視点を獲得できる。	映像で前時を振り返り、遊びをより面白くする視点を導き出す。
4	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	オフサイドやファウル、試合時間や再開方法などのルールの意味を確認し、生徒提案（1回目）の遊びを実施する。
5	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	サッカーにおける技術の意味や、練習の必要性について理解し、生徒提案（2回目）の遊びを実施する。
6	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	サッカー経験者と未経験者との間で生じるプレーのしづらさを思考し、生徒提案（3回目）の遊びを実施する。
7	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	これまで重ねた議論と遊びを受け、最後の生徒提案（4回目）の遊びを実施する。
8	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	4回提案された遊びから、最も面白いとされ

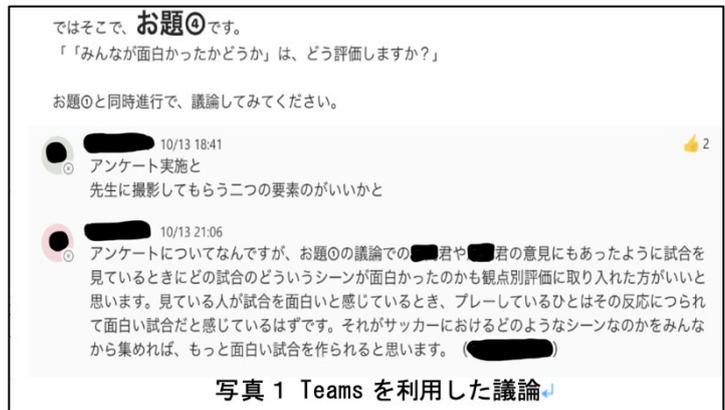
	白くする議論を展開できる。	たものを再構成し実践する。
事後	サッカーへの捉えがどのように変容したのかを認識し、学んだことを言語化できる。	生徒から集めた評価項目を元にアンケートを作成し、単元を振り返る。

○ 実践の内容

サッカーを遊びと捉え、参加する生徒全員がより楽しい、面白いと思えるサッカーを創り出すことが、生徒と共有する活動の目標である。

実践の事前活動では、そうした目標を生徒と共有した上で、1人1台端末環境を利用して、アンケート、Teams を使ったオンライン上でのサッカーづくりに関する議論及びサッカーに関する調べ学習の共有を行った。この目的は、活動に対する関心・意欲、当事者意識を高めるとともに、サッカーづくりに関するいくつかの観点について深めることである。実践前にこうした活動を行った意図は、授業では考えたルールに基づくサッカーを行い、それを振り返って議論し修正する時間をなるべく多く確保するためである。

例えば「「みんなが面白かったかどうか」はどのように評価しますか？」といったテーマが与えられ、生徒は様々な観点から考えを出し合い、「みんなが楽しめるサッカーづくり」について深めることができた（写真1）。



実践は、単元計画に示した第4時から8時で行った。各授業は、次のような展開で行った。まず生徒がその日に行うサッカーのルール等のプレゼンを示し、それについて質疑応答を行う。続いて、サッカーを実践し、その様子を端末を用いて撮影する。そして、撮影した動画やホワイトボードを用いながら実践を振り返り、意見交換を行う。最後に、学習感想及びサッカーノートを記述するという流れである。



写真2 ルールのプレゼン

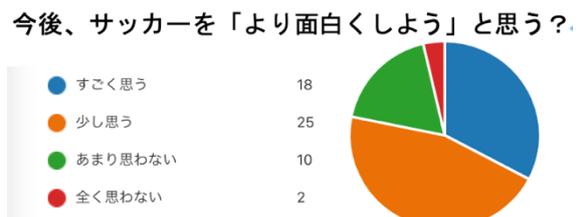
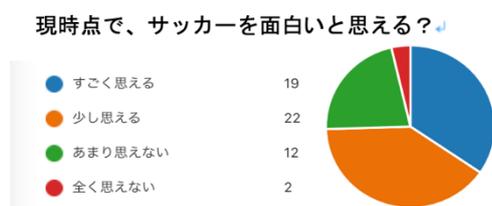


写真3 端末での撮影

単元後には、アンケートを実施した。単元前アンケートと比較して生徒の変容を探り、実践の有効性を検討する資料とした。

成果

単元前アンケートでは次のような結果だった。



目標の「クラスみんながサッカーをやって、「面白かった」となること」は実現できたと思いますか？



あなたは自身は、サッカーをやって「面白かった」と思えますか？



単元前後のアンケートを比較すると、80.8% (52人中42人) の生徒が実践目標を達成できたと感じていることが分かる。また、74.5% (55人中41人) から92.3% (52人中48人) と、サッカーの面白さを感じている生徒が増えていることが分かる。

また、自由記述では次のような生徒の記述がみられた。単元前アンケートでは、サッカーへの意欲を読み取れるものの、サッカーの面白さを理解するに至らないことも読み取れる。これに対し、単元後のアンケートでは、自分たちで遊びを模索することで、一層サッカーを楽しむことができ、未経験者を包摂するルールづくりが、全員が楽しめるサッカーづくりに寄与したと実感していることが伺える。また、本活動がサッカーに対する主体的なかかわりを促し、サッカーの面白さの実感につながっていることも一定の成果だろう。

こうした生徒の様相は、遊びに主体的にかかわり、協働してよりよい空間を創造するという「遊び」から学習が発展していく主権者教育実現を示した子どもの姿と考えられる。

【単元前アンケートより】

Q1 現時点でサッカーを楽しんでいるか？
あまり思えない。理由は、ボールをとりに行こうとすると、けがをしてしまうかもしれないと怖くなって、とりにいけないからです。それと、あまりサッカーをしたことがないのでサッカーの真の面白さを身に染みて体感したことがありません。サッカーのどこが楽しいかも正直あまり理解できていないからです。

Q2 今後より面白くしようと思う？
すごく思う。サッカー以外にも言えることですが、やるからには楽しみたいです。だからうまくになりたいのもそうですが、やはり一番は楽しみたいので、より面白くしたいです。

【単元後アンケートより】

Q3 一番楽しかった授業は？
遊び4回目の授業。議論で自分が思う改善したいところを、みんなで話し合い改善できたことにより、前も面白かったがさらに面白くなったのはここだと思ったから。また4回目ということもあり、以前より少しだけ上手くなっていくことも楽しかった要因の一つ。

Q4 目標達成できた？その理由は？
すごく思う。未経験者にもすごく配慮されたゲームだったため、未経験者でも活躍できる場所があったり連携が必須だったりと面白い、楽しいを実現できたと思います。

Q5 あなた自身は面白いと思える？
すごく思える。普通のサッカーをしていると、毎回、何もできず、ただ傍観しているだけになってしまうから、正直、今回の授業でもそんな感じになると思っていた。だけど、今回は、未経験者を思いやるサッカーで何もできなかった僕からすると、ただボールをパスしてもらい、ボールに触る。この何気ないものがとても楽しかった。ボールが自分にくるからこそ、その分頑張ろうと思えた。そういう熱くなれる気持ちも含めて楽しかった。

課題

- 本実践を受け、上記のように、サッカーの知識や思考力、判断力、表現力等、これらを支える学びに向かう力は高まりを見せた一方で、技能の高まりの可視化はやや不十分である。実践者の観察や、記録映像の分析、生徒の実感を踏まえれば、技能の高まりはあるといえる一方で、その高まりが何に起因するものなのかを今後実証したい。
- 遊びを手段的に捉えず、目的のあるいは学習の起点として捉えることを他教科と共に見出すことが必要である。文化としての「遊び」には、「概念」と「具体」が混在し、教育に「手段」的認知が充満している。あるいは、遊びが社会や教育から排除される様相もあるが、「遊び」の持つ自発性、主体性、他者性、協働性といった特性を生かし、社会との関連性や教育における可能性についても検討していく必要がある。例えば、数学科との関連において、「スポーツの勝敗確率」をどう分析し、遊びの不確定性と結合させるか。さらには、社会科との関連で、「ルール」が決定し実行されていくプロセスの学習や、文化から排除されてしまう人々を生む社会構造を紐解くなどが考えられる。つまりは、より良く生きることを模索する教育の一つとして「主権者」教育が他教科との連携において意味を持つことをさらに研究する必要がある。

小中高を一貫する主権者教育の学習プログラム

【主権者教育で目指す児童・生徒像】・国や地域社会が抱える問題と向き合い、法やきまりをもとに考察し、政治、経済に関する知識を理解し、他者と連携・協働しながら、より良い社会を実現するための方策を主体的に考え、その考えを伝え合う中で相違点を見出し、更なる改善策を追究することができる児童・生徒。				単元レベルでの活動の手立て					
校種	【小学校】	【中学校】	【高等学校】	小6 「共に生きる社会」	中3 「選挙に行こう！」	高2 「インクルーシブな選挙」	中3 「誰もが楽しめるサッカーを考える」	小5 「出生率を計算して少子化を考える」	小3 自己実現活動(体育的活動)「ぼくらのオリンピック」
目標	・自分たちの身の周りで起きている地域の課題に興味をもち、実際に当事者へインタビューをしたり、諸資料を集めたりすることを通して問題を自分事化し、より良い地域や社会を実現するための考えを伝え合う中で違う立場や考え方があはることに気づき、更なる改善策を検討する子ども。	・身の周りの社会や国家の法やきまりについて事実を基に多面的・多角的に考察し、当事者や専門家へのインタビュー、アンケート調査など適切な資料を活用しながら政治、経済等に関する知識を習得し、課題の解決に向けて、他者の考えを受けとめ、自らの考えを深めるなどして、よりよい国家・社会のあり方、自分の生き方をじっくり考えて行動しようとする生徒。	・社会で起きている課題に対して法やきまりに関する事実を基に、当事者としての関わりを見出し、実際に当事者や専門家へのインタビューや適切なアンケート調査、諸資料の収集などの探究的学びから、国際的な視野を持ってより良い社会を実現するための具体的な方策を議論する。更に、違う立場や考え方があはることを理解をよりいっそう深く、自分が社会においてどのような立場かに関わるかを想定して改善策を検討できる生徒。	・視聴覚資料やインタビュー活動を通して視覚障害をもつ人々の生活の工夫や苦労を理解し、誰もが安心して生活することができる共生社会の実現に向けて自分や社会が取り組まなければならないことについて障害を持つ人々の立場に立って考え、提案することが出来るようになる。	・現代の選挙制度について障害をもつ人々の立場から課題を見だし、公平・公正の視点から考察し、背景となる課題について理解する。 ・多様性を認め合う社会を目指して、どのような課題があるのか見つけ出し、その解決に向けて取り組む人々の姿を学ぶことを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つけたりしながら、よりよい社会の実現にむけて自らの生き方・あり方を問い直す。	・知的、発達の両方の障害をもつゲストティーチャーとして招き、選挙という主権者としての権利行使の場における困難さを当事者から聞き、それをいかにして解決もしくは緩和できるかを、本人と交えて議論していく。主権者としての意思を示す限られた貴重な機会である選挙における権利行使の意味【(2)イ】を理解した上で、障害の有無に関わらず一人ひとりの人間が尊重される社会の実現【(2)ウ】及び、現代に共に生きる人間として求められる望ましい生き方の考察【(3)】を仲間とともに深めていくこと	・サッカーという遊びを構成するルール(仕組み)を軸に自らがその空間を生み出す主体となって、より面白い遊びを創りだす。 ・起きていた事象を振り返り(感想の共有、意見交換、評価)、次回に向けてアクションを起こす。	・合計特殊出生率を表す数値をもとに、日本の少子化の状況を理解する。 ・少子化のもたらす影響についてこれからの日本の社会にとってどうなることが良いことなのか、自分の視点をもって評価する。	・クラスみんなが参加できるように、ルールや組織を対象とし、オリジナルオリンピック大会を創る。
知識・技能	・地域や社会の現状や抱える課題に関わる人々の取り組みを理解するとともに、新聞記事や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身につける。	・社会や国家の抱える諸課題(政治、経済、法など)に関する現状や制度及び概念について理解するとともに、調査や諸資料から情報を効果的に調べまとめる技能を身につける。	・国際社会や国家、地域などの現状や抱える問題に対して明確かつ的確な採られた探究課題を設定しうえてこれまでの社会における取り組みを適切に理解する。併せて適切かつ関連性のある情報を収集し記録するための研究方法を活用する力を身につける。	・視聴覚資料やインタビュー活動等を通して、視覚障害をもつ人々の生活の仕方や工夫、苦労等について理解することができる。 ・視覚障害について自分がかもつ疑問を項目にし、インタビューをすることで視覚障害について理解を深めることができる。	・障害のある人にとっての選挙での困難さに理解をし、その課題について、異なる立場や対立する問題の権限を捉え、問題点を見いだすことができる。	本時においてはこの観点は評価対象としない。	・サッカーの面白さやルールを理解し、採用しているルールがゲームにどのような意味(効果、課題)を持つのかを見いすことができる。 ・サッカーを面白くするために求められる技能を見いすことができる。	女性一人あたりが生涯に産む子供の人数を表す「合計特殊出生率」は、男性を合わせた2が現状維持の数値であることを説明する。 女性の数と新生児の数を比例させていることを読み取る。	・スポーツの競技会には、組織する人がいることを理解し、競技会運営に参画することができる。
思考・判断・表現	・地域や社会の特色や抱える課題について、多面的・多角的に捉え、その解決に向けて自分たちは何ができるかを選択・判断し、考えたことを説明したり、それらをもとに議論をしたりする。	・社会や国家の抱える諸課題について、多面的・多角的に分析し、公正に判断することができる。 ・複数の事象の関係を構造的に捉え、わかったことを筋道立てて説明することができる。 ・諸課題の解決に向けて、他者の考えを受けとめ自分の考えをさらに深めていくことができる。	・国際社会や国家、地域の特色や抱える課題について、関連する概念やモデル、理論について詳細な議論を通じて情報統合し、有効かつ根拠のある主張をまとめて適切な公的機関等への提案を行う。	・障害をもつ人々の立場に立って、誰もが安心して生活することができる共生社会が実現するために、何が必要なのかをインタビューや調査活動を通して考え、発表することができる。	・障害のある方が選挙で感じる問題について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができる。	ゲストティーチャーから提案を受けた課題に対して、具体的な制度上の問題点を考察している。チームメンバーと共同して議論を深めるための発言が効果的に出来ている。	・サッカーの面白さやルールについて、多様な価値観、技能差を持つ他者とともに考察し、より多くの人が楽しめる方法を判断し実行していくことができる。	少子化は現状のままでよい、改めてはならないなど、少子化について自分の視点を以て評価する。 自分の視点以外の視点の意見を聞き、自分の意見をまとめる。	・オリンピック大会運営に関わって、自らの役割を理解し、よりよく運営ができるよう工夫することができる。
主体的に学ぶ態度	・地域や社会が抱える課題について、主体的に問題を解決しようとする態度や、より良い社会を考え、学習したことを活かそうとする態度を養う。	・社会や国家の抱える諸課題について、主体的に問題を解決しようとして、よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に参画しようとして、自分の学びのあり方を問い直す態度を養う。	・地域や社会が抱える課題について、主体的に問題を解決し、よりよい社会の実現のために自らの学びを適切に振り返ったうえで今後の学びのあり方を自ら調整する態度を養う。	・新聞記事やニュース映像等から社会が抱える問題について見つけようとしている。 ・視覚障害をもつ人々が社会で活躍する様子や私たちが何をしたいかが誰もが活躍できる社会が実現できるかを考えようとしている。	・現代社会の特色を捉え、障害者との結びつきに対する関心を高め、主体的に追究しようとしている。	議論を通じて、何をすることが出来たかを認識している。ここで得た気づきを、これからの学びにおいて何が必要となるかの理解へ繋げられている	・サッカーが遊びの一つであるという前提から、遊びを多くの他者と共有して面白い空間を生み出そうとしている。	7年後には選挙権をもつことを自分なりに自覚し、社会の出来事を目を向けようとする。	・オリンピック大会開催に向けて進んで取り組むことができる。

小中高を一貫する主権者教育の学習プログラム

【開発するプログラムの概要】「意思決定」に関わる資質や能力を軸として、社会科を中心に、算数・数学、体育・保健体育の3教科で「知・情・意」を意識した連携を図り、「遊び」を活用しながら「合意形成」をテーマにカリキュラム・マネジメントを通した小中高を一貫する主権者教育の一つの学習プログラムを開発する。

		小学校	中学校	高等学校
各教科	社会科	<p>◎ 聴覚障害の方との対話</p> <p>【小6】誰もが安心して暮らせる共生社会の実現に向けて自分や社会が取り組むべき課題を話し合う。</p>	<p>◎ ALS 障害の方との対話</p> <p>【中3公民】日本の障害者支援のアンケートをふまえ、現在の選挙の課題を直接聞き、公平・公正の視点から話し合いを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つたりしながら、多様性を認め合う社会を目指して自らの生き方・あり方を問い直す。</p>	<p>◎ 知的障害の方との対話</p> <p>【高2現社】インクルーシブな選挙制度の実現のために主権者として、諸制度を適切に理解するとともに制度の影にある諸課題を浮き彫りにし、解決策を議論する。</p>
	公民科	<p>◎ 実社会との接点・意思決定</p> <p>【小6】選挙制度を学習し、仮の選挙公報を作成して模擬投票を行い、各自で投票した理由を考察した。</p>	<p>◎ 実社会との接点・意思決定</p> <p>【中1地理】人口減少社会となった日本が直面する労働力不足への対策としての移民・外国人労働者の劣悪な労働環境について話し合う。</p>	<p>◎ 実社会との接点・意思決定</p> <p>【中3公民】国家緊急権の導入の是非をめぐる議論を通して、民主主義のあり方や主権者としての意識を高める。</p>
	<p>【遊び】◎当事者との対話や、専門家へのインタビュー、アンケート調査などの諸資料の収集など、探究的な学びの場を設定する</p>			
各教科	体育・保健体育		<p>◎ 実社会との接点・意思決定・合意形成</p> <p>【中3体育】サッカーという遊びを構成するルール（仕組み）を軸に、自らがその空間を生み出す主体となって、より面白い遊びをつくりあげるために、自分たちのグループで起きていた事象を振り返り、感想の共有、意見交換、評価をしながら改善に向けてアクションを起こす。</p>	
	<p>【遊び】◎チームスポーツを通して全ての参加者が楽しめるための戦術や公平・公正なルールのあり方について協働する場を設定する</p>			
各教科	算数・数学	<p>◎ 実社会との接点</p> <p>【小5】出生率1.3の値が小数値であることから10人を単位に日本の少子化の現状と課題について話し合う。</p>		
	<p>【遊び】◎身近な事象や関心事を糸口に実社会の課題と結びつけ、数学的な見方・考え方を働かせて多角的・多面的に考察する場を設定する</p>			
道徳・特別活動・総合	<p>◎ 意思決定・合意形成・自治活動</p> <p>【自己実現活動】自らやりたい事柄を紙に書き、互いに呼びかけながら自主的に参加して、互いに協力しながらやりたいことを実現していく活動。</p> <p>【小3】クラスみんなが参加できるオリムピックを創る</p>	<p>◎ 意思決定・合意形成・自治活動</p> <p>【生徒会活動】生徒会役員選挙において、投票する権利の保障の観点から「期日前投票制度」の創設に向けて生徒会役員自ら率先して、全校生徒、教職員への提案、規約の改正を行い、期日前投票の制度を作り上げた。</p> <p>【生徒会役員選挙】生徒会選挙の実施要領に基づき、選挙管理委員会の発足、公示、選挙ポスター、立ち会い演説、投票に至る過程を全て公正な手続きに基づいて実施するとともに、文京区選挙管理委員会と協力して実際の選挙で使用する記帳、投票箱を借り受けて生徒会役員選挙を実施した。</p>	<p>◎ 意思決定・合意形成・自治活動</p> <p>【学校行事の運営】</p> <p>・学校行事・修学旅行の立案・計画・運営にいたる過程を生徒の自主的な活動で実施している。</p>	
<p>【遊び】◎自分がよりよく生きる、またはよりよい社会のために、他者と協働して、自らの意思・判断で行動する場を設定する</p>				

主権者教育で目指す
資質・能力

- 地域・社会の諸課題についての理解
- 調査や諸資料から情報を適切にまとめる力
- 公平・公正に判断する力
- 地域・社会の諸課題の解決に向けて協働して取り組み、合意を形成していく力
- 自己理解・他者理解
- よりよい社会の形成に参画しようとする力

◎ 実社会との接点 地域・社会や産業界との連携・協働

